

時事評論  
現代を  
読む  
8

森本あんり

# 教会と男性

## ——人類の別の半分はどこに

もりもと・あんり  
1956年生まれ。  
国際基督教大学  
東京神学大学、ブ  
リンストン神学大  
学(BRU)卒業。  
国際基督教大学教  
授。



辛淑玉さんが本誌第6号の「ハタから見たキリスト教」でこんなことを言っておられた。「女の牧師で、教会で女が楽しくやっていたら、女がともたくさん集まって、そして女が集まる場所には男がいてくるのよ」。その通り。

日本の多くの教会は、男性牧師と女性信徒という組み合わせなので、男性信徒の位置づけが希薄である。わたしは、最初に赴任した教会で女性の主任牧師に育てられた。高倉徳太郎の高弟（高妹？）で、お会いしたときにはすでに79歳であったが、凛として強く美しい、まことに優れた牧師であった。

この牧師に説教と牧会の要諦を一緒に学ぶことができたことを、今も心から幸いに思っている。

日本の教会は、この点ではアメリカの主流派諸教会よりもずっと前を進んでいた。けっして数は多くないが、女性の牧師職は戦前から認められており、少数なだけに

とびきり有能な牧師が活躍していたのである。

わたしの主任牧師もそんな先達のひとりであった。辛さんの言葉の通り、その教会では彼女の回りに楽しげな女性たちの輪があり、さらにそれを支える男性信徒のしっかりとした厚い層があった。女性も生き生きしていたが、何と

いってもその教会には男性信徒の居場所と役割があったのである。「教会と女性」というテーマが近年よく論じられるが、教会が論じるべきもつと深刻なテーマは「教会と男性」である。というよ

り、「教会と男性の不在」である。日本の教会には男がいらない。礼拝や集会はどこも女性ばかり。いや、男性もいるにはいる。でも、教会に来る男性って、何となく覇気のない「やさおとこ」が多くありませんか。ここで「男らしい男」などと言うと、まさに因習的なジェンダー理解を再生産してしまうお

それがあるので言わないが、自分の教会を見回して多くの方が同意してくださると思う。

なぜこうなってしまったのか。それは、現代日本の教会が男性向けに作られていないからである。働き盛りの成年男性信徒が興味をもてるものが少なく、彼らの働き場もない。神学も説教も賛美歌も祈りも、彼らの求めるものに合っていない。よく女性について「人類の半分を無視して」と言われるが、無視されているのはむしろ別の半分ではないかという気がしてくる。

「でも、男は仕事で忙しいから」などと愚にもつかぬ言い訳を言っではいけない。女だって忙しいのに来ていなのだ。それに、男は忙しくてゴルフに行く暇はある。教会がゴルフほどの魅力をもっていないだけの話である。では、はたして教会と娯楽を同列に論じてよいものか。

実は、これらの問いに正面から向き合ったのが、100年前のアメリカである。19世紀末にフロンティアが消滅したアメリカは、上品なビクトリア朝の都会文化に席卷され、男性たちは教会に來なくなる。20世紀初頭のある統計では、教会員は7割が女性、礼拝出席に至っては、なんと9割が女性であった。そこで彼らは真剣に考え、原因を尋ねて対策を講じる。それが現在のアメリカ教会の基礎体力となったのである。

宗教のバイタリティにとって男性の存在がいかに重要かを知るには、今日のイスラム教を見ればよい。なぜイスラムがあれほど元気なのか。それは、よくも悪くも彼らの信仰に、男性の血をたぎらせるものがあるからである。

本誌男性読者のみなさん、自分の信仰に血のたぎりを感じたのは（教団総会以外で）いつのことですか。